様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０１９１

研究課題名（和文）ニューディール政策のFSA写真プロジェクトにおける〈貧困〉と〈被災〉の表象

研究課題名（英文）Reconsidering FSA Photography: Representations of poverty and natural disasters in New Deal America

研究代表者
竹中　悠美（TAKENAKA, YUMI）

立命館大学・先端総合学術研究科・准教授

研究者番号：９０５９９９３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は大恐慌期アメリカで農民救済を目的として撮影されたFSA写真を流通と受容のプロセスから検討した。1930年代のニューディール政策とフォトジャーナリズムと美術館を通じて、FSA写真はヒューマニスティックな写真芸術として、そして「貧しくとも強い」国民的記憶イメージとして受容されていったことを明らかにした。さらには国外での文化外交にも活用されたが、一方でそれらのプロセスは、今日にも続く被写体と観者との倫理的緊張を孕んでいたことが指摘できる。

研究成果の概要（英文）：This research investigated the process of circulation and evaluation of the FSA photography which originally aimed to relieve rural farmers during the Great Depression. It revealed that through New Deal programs, photojournalism and art museums in 1930 's the FSA photography was getting to be accepted as a humanistic photographic art and then the images of national memory; poor but tough. Moreover, the FSA photography was utilized for cultural diplomacy in foreign countries. On the other hand, we should notice that these processes included some ethical tensions between the photography subjects and the viewers then and now.

研究分野：芸術学・視覚文化論

キーワード：ドキュメンタリー　写真史　アメリカ美術　フォトジャーナリズム　ニューディール　文化外交　災害表象　貧困表象

１．研究開始当初の背景

(1) まずFSA写真プロジェクトとは、1929年に勃発した大恐慌による危機的状況を打開すべくローズヴェルト政権が展開したニューディール政策の一環として設置された農業保障局（Farm Security Administration）によって1935 年から44年まで実施された記録写真のプロジェクトであり、現存する20万点ものFSA 写真はアメリカにおけるドキュメンター写真確立への貢献だけでなく、大恐慌から第二次世界大戦へ向かう時期の歴史資料としての価値があり、さらに芸術的に高く評価される写真も数多く含まれている。

(2) 本研究に関連する国外の研究動向は、1960年代に本国アメリカでFSA写真の再評価が始まって以来、写真史、写真論、美術史、視覚文化論、アメリカ研究、ジャーナリズム論、文化政策論など様々な研究領域から途切れることなくアプローチが続いている。さらに、リーマンショックと医療保険制度改革を掲げたオバマ政権の誕生後、改めて大恐慌とニューディール政策を賛否双方の立場から議論する気運が高まると同時に、1930年代の文化への注目も高まり、FSA 写真についての研究書の出版や美術館での展覧会も相次いだ。

(3) 一方、日本国内における研究状況は、FSA写真の存在についてはアメリカ写真およびアメリカ文化を論じる中では必ず言及されるものの、FSA 写真プロジェクトそのものを議論する研究はごくわずかしかない。さらに FSA写真の被写体の中心であった農民の困窮の原因が大恐慌だけでなく、度重なる自然災害の被災にあったことに注目している研究は見当たらず、被災の表象という観点から論じたものもなかった。

２．研究の目的

1930 年代は大恐慌を契機として急進的な社会制度改革が実行された時期であるとともに、フォトジャーナル誌が続々と発刊されることによって視覚的マスメディアの新しい情報網が生まれ、かつニューヨーク近代美術館を嚆矢としてデザインや写真も包括する美術館制度の形成期でもある。そのような状況を時代背景として、本来、一政府機関の資料収集として撮影された記録写真が、いかにして大恐慌期アメリカを表象する写真イメージとして受容されるに至ったのか。「ニューディール政策のFSA写真プロジェクトにおける〈貧困〉と〈被災〉の表象」を課題とする本研究は、FSA 写真の中でも農民の〈貧困〉と自然災害による〈被災〉の表象を中心に、それらの写真と写真プロジェクトそのものの意義と問題を、政治・経済・文化が交叉する社会的流通のプロセスと 受容の文脈から解明することを目的とする。

３．研究の方法

(1) 先行研究ならびに『Survey Graphic』、『U.S. Camera』、『Look』、『LIFE』等の 1930年代の主要なフォトジャーナル誌と関連の書籍や写真集、映画のDVDなどの視覚資料及び政府文書資料を収集。

(2) 上記の文献資料・視覚資料の調査より、主要な論点や作品、並びに写真家、FSA 関係者、美術館関係者、批評家、研究者などを抽出。ニューディール期の政治・経済と貧困や災害についての問題認識と整理。

(3) FSAの前身であるRA（再入植局）と1942年にFSAを吸収するOWI（戦時情報局）の活動およびアメリカ議会図書館で公開されているFSA写真アーカイヴの現地調査。

(4)美術館等での FSA 写真の展示方法とオリジナルプリントの質的特徴についての現地調査。および学芸員への聞き取り調査。

(5) 各種学会や研究会での発表を通じて、他の研究者との意見と情報交換。

４．研究成果

(1)　2013年度は、23巻のマイクロフィルムから成る「FSA-OWI Written records 1935～1944（アメリカ議会図書館）」に残るFSA写真プロジェクトのディレクター、R・E ・ストライカーの書簡と上述の文献資料・視覚資料をもとにFSA写真の評価と保存に寄与した「芸術」の文脈への導入を調査した。そこから1938　年にニューヨークで開催された「第一回国際写真展」と「アメリカン・フォトグラフ」展、そして後者に続くニューヨーク近代美術館での写真展の重要性を明らかにし、「アメリカ写真」という文化的アイデンティティ確立という観点から、民族藝術学会での口頭発表（学会発表⑧）を経て、 『民族芸術』に論文を発表した（雑誌論文③）。

さらに上記のFSA写真の芸術化の流れのキーパーソンとしてニューヨーク近代美術館写真部ディレクターであった E・スタイケンの重要性が浮上し、彼とFSA 写真の関係、そして彼が企画した写真展についての調査を重点的に行った。その中で、ルクセンブルクで保存・展示されている「ザ・ ファミリー・オブ・マン」展と「ザ・ビター・イヤーズ」展の現地調査を行い、学芸員へのインタビューを行うとともに、ルクセンブルクの他の美術館、並びに周辺国であるベルギーとオランダの美術館も調査し、なぜFSA写真の展覧会がルクセンブルクで保存・公開されているのかについて、発表し(学会発表⑥、雑誌論文④)、さらにルクセンブルクとアメリカ間のパブリック・ディプロマシーという観点からの考察を加え、共著で公刊した（図書①）。

(2) 2014年度はワシントンD.C.のアメリカ議会図書館に所蔵されているFSA写真のアーカ

イヴ、The Farm Security Administration/ Office of War Information Photo Collection とカリフォルニア州オークランド美術館の Dorothea Lange Archive で FSA 写真のオリジナルプリント、ネガ、オリジナルファイル、その他資料の保管方法と保存状態、およびそれらアーカイヴの公開状況について調査を行った。

加えて、大恐慌時のアメリカの文学と 1930 年代アメリカで数多く出版された「ドキュメンタリー・ブック」と呼ばれるルポルタージュと写真から成る出版物について、コールドウェル『あなたは彼らの顔を見た』(1937)、マクリーシュ『自由の大地』(1938)、エイジー『今こそ名高き人々を褒め讃えん』(1941) 等を考察し、スタインベックの小説『怒りの葡萄』(1939) とジョン・フォード監督によるその映画 (1940)、それらに対して D・ラングの FSA 写真と経済学者 P・テイラーによるドキュメンタリー・ブック『アメリカン・エクソダス』(1939)における農民の貧困と被災の表象と、FSA 写真の被写体のリアクション事例から、そこに潜む倫理的問題点について文芸学研究会と同志社大学人文科学研究所研究例会で発表を行った (学会発表③、④)。

また 1930 年代に中西部の広大な地域に甚大な被害を及ぼした砂嵐「ダスト・ボウル」に集約される大恐慌期の自然災害の表象を G・ワイゼンフェルドによる 1923 年の関東大震災の大都会での被災の視覚表象についての研究との比較的観点から考察し、検閲をかいくぐって絵葉書という形で被災者のショッキングな死体の写真も流通していた後者に対して、政府機関による FSA 写真では撮影時に被写体への配慮が要求されていたが、出版メディアで流通する際にはレイアウトや前後頁の記事との関連から、FSA 写真の被写体に対しても人種差別的関心や性的関心が暗示される事例があることを明らかにした(学会発表⑤)。

(3) 2015 年度は写真表象における倫理的問題を、映画を起源とする「ドキュメンタリー」という表現方法が誕生時より情報の伝達だけでなく、受容者への情緒的働きかけを重視しているように、FSA 写真にも貧困の美学化の問題が内在しており、1960 年代以降の FSA 写真再評価の動きにも、美的懐古が見出せることを批判的に考察した。(雑誌論文①)

FSA 写真を代表する写真家の一人である D・ラングは FSA 写真プロジェクト終了後、戦時中にカリフォルニア州マンザナーの日系人強制収容所の写真を撮影しており、ラングの写真が啓発した倫理的問題を考察するため、収容所跡地の Manzaner National Historic Site とロサンゼルスの全米日系人博物館における日系人強制収容問題についての展示を現地調査した。その調査に基づく研究は本研究課題の成果をまとめる単著に収載予定である。

また、風景をテーマにベルリン自由大学美術史研究所の研究者たちとの国際ワークショップを開催し、歴史的な風景 (場所と建築物) の中の写真の展示という問題意識から、ルクセンブルクのクレルヴォー城とデュドゥランジュの給水塔での FSA 写真の展示は、第二次世界大戦時の連合軍との関係やルクセンブルクからアメリカへの移民の歴史についての記念碑的側面があることを英語で発表した (学会発表①)。

加えて、被写体に対する写真の暴力性の問題を発展させて、第二次湾岸戦争時のイラクのアブグレイブ収容所における抑留者の写真とインターネットにおける氾濫についての S・ソンタグの評論における倫理的議論の考察と、ソンタグのイコノロジカルな分析は被害を受けている被写体そのものから乖離している問題を論じた (雑誌論文②)。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①竹中悠美、アブグレイブ写真のイコノロジー」、生存学、生活書院、査読無、Vol.9、2016、pp.128-141

②竹中悠美、FSA 写真再考―大恐慌期のドキュメンタリーにおける貧しき者への眼差し―、社会科学、同志社大学人文科学研究所、査読有、第 45 巻第３号、2015、pp.1-24

③竹中悠美、〈アメリカ写真〉の誕生―FSA 写真とニューヨーク近代美術館―、民族藝術、査読有、第 30 号、2014、PP.180-187

④竹中悠美、外交戦略としての写真展―ルクセンブルクの〈ザ・ファミリー・オブ・マン〉と〈ザ・ビター・イヤーズ〉―、平成 23-25 年科学研究費基盤研究(A)「社会システム〈芸術〉とその変容：現代における視覚文化／美術の理論構築」研究成果報告書、査読無、2014、PP.98-105

⑤竹中悠美、「FSA 写真プロジェクトにおけるプロパガンダとしての貧困イメージ」、平成 20-22 年度科学研究費基盤(B)「プロパガンダと芸術―〈冷戦期・冷戦後〉」研究成果報告書、査読無、2013

〔学会発表〕（計８件）

①Yumi Kim Takenaka、Historic Landscapes of two Spaces for the Edward Steichen Collections in Luxembourg 、International joint workshop *Crossing Gazes on the Landscape from Berlin and Kyoto*、2015 年 11 月 23 日、立命館大学衣笠キャンパス(京都府京都市)

②竹中悠美、災害のランドスケープ２　―1930 年代アメリカのドキュメンタリー・ブックについて―、第 3 回「風景のイメージとそ

の人類学的諸相」研究会 2015 年 6 月 16 日、立命館大学衣笠キャンパス(京都府京都市)

③竹中悠美、貧しき者への眼差しをめぐる一考察―ニューディール期のドキュメンタリー写真の受容から―、同志社大学人文科学研究所　第 18 期第 11 研究例会、2015 年 5 月 16 日、同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)

④竹中悠美、1930 年代アメリカの災害表象における文学的救済と写真的呵責、文芸学研究会第 57 回研究発表会、2015 年 2 月 21 日、立命館大学朱雀キャンパス(京都市京都府)

⑤竹中悠美、災害のランドスケープ―1920-30 年代の日本とアメリカ―、第 5 回「風景のイメージとその人類学的諸相」研究例会、2015 年 1 月 9 日、 立命館大学衣笠キャンパス(京都市京都府)

⑥竹中悠美、アート資源なき小国の写真コレクションに覗く外交戦略 ―ルクセンブルクの〈ファミリー・オブ・マン〉と〈苦渋の時代〉―、公開コロキウム「社会システム〈芸術〉―全体像の解明に向けて―」、2013 年 11 月 17 日、山口情報芸術センター(山口県山口市)

⑦竹中悠美、大恐慌のドキュメント写真における〈貧困の身体〉、公開コロキウム「社会システムの中の身体／アート」、2013 年 6 月 23 日、立命館大学衣笠キャンパス(京都府京都市)

⑧竹中悠美、1930 年アメリカにおけるドキュメンタリーとアートの接合、第 29 回民族藝術学会大会、2013 年 4 月 28 日、郡山女子大学(福島県郡山市)

〔図書〕（計２件）

① 岡林洋編、晃洋書房、カルチャー・ミックス―文化交換の美学序説、2014 年、竹中悠美、他、「ルクセンブルクのスタイケン・コレクションについて　―パブリック・ディプロマシーとしての二つのアメリカ写真展―」、pp.216(166-186)

② 林洋子編、近現代の芸術史　造形篇 II アジア・アフリカと新しい潮流、幻冬舎、2013 年、竹中悠美、他、「第８章　韓国―近現代美術の流れ」、pp.208(95-106)

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

研究業績・情報を公開しているホームページ

(1)立命館大学 研究者学術情報 データベース
http://research-db.ritsumei.ac.jp/Profiles/95/0009465/profile.html

(English)
http://research-db.ritsumei.ac.jp/Profiles/95/0009465/prof_e.html

(2)立命館大学大学院 先端総合学術研究科ホームページ
http://www.r-gscefs.jp/?p=2152

６．研究組織

(1)研究代表者
竹中　悠美（TAKENAKA, Yumi）
立命館大学・大学院先端総合学術研究科・准教授
研究者番号：９０５９９９３７

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：